




博士学位論文審査結果要旨

2004年 9月 17日

学位申請者	楊 華	
審査委員	主査	村木 新次郎 
	副査	寺川 眞知夫 
	副査	李 慶祥 
論文題名	中日両言語における形式動詞の対照研究	
(要旨)	<p>この論文は、中国語と日本語における形式動詞について考察をくわえたものであり、形式動詞をふくむ語結合の諸特徴（とりわけ形式動詞がになう文法的な意味）に言及したものである。</p> <p>この論文でいう形式動詞とは、「連絡を／指揮を とる」「期待を／圧迫を かける」「做准备／報告」「加以 支持／保护」における「とる」「かける」「做」「加以」などの動詞のことで、「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞」と定義される。中日両言語には、専用の形式動詞と、実質動詞としての使用も認められる兼用の形式動詞がある。豊富な対訳の資料を使って、二言語の共通点や相違点を明らかにした点は高く評価できる。従来の中国語の形式動詞の研究は、それと結びつく目的語の分析にかたよっていて、形式動詞そのものの研究はあまりみられないようである。とりわけ、形式動詞がになっている文法的な意味に注目したものは少ない。この論文は、形式動詞がヴォイス、アスペクト、ムードといった文法的な意味に、どのように関わるかに関心をよせ、その点を吟味しているところに特徴がある。</p> <p>著者は、研究の方法として、両言語の新聞、評論、文学作品などの対訳コーパスから形式動詞を含む語結合を採集し、それらの実例にもとづく記述をおこなっている（ただし、個々の例文の出典が明記されていないのは残念である）。著者みずからの翻訳を極力さけているのは、主観や恣意性を排除しようとする姿勢をあらわすものであろう。研究者個人の主観的な判断にもとづく表現には、しばしば恣意性があらわれ、そこに文法の妥当性をみるのは危険をとまなうのである。著者は、実例を重視し、言語の実際の使用から客観的な結論をみちびくという、研究の姿勢をつらぬいている。この論文には、多くの実例と、実例から抽出した語結合の具体例が示されている。こうした言語事実の実証的な記述は、研究の客観性を保証するものであり、かつ研究の対象が特定の言語現象にかたよることなく、言語の使用の全体に及んでいて、結果としてあつかった内容を体系的なものにしている。形式動詞の多くは、基本的な動詞であり、提示された語結合の例は、今後の日中両言語における辞書編纂や言語教育（学習）にも有益であり、そのための貴重な資料を提供しているといえる。</p>	

著者は、中日両言語の動詞の形態論を整理し、その中で形式動詞の位置づけをおこなっている。ここでは、単語の形態素に対する優位性を強調する。単語は、言語のもっとも基本的な単位で、語彙的な意味をになう一方、文の直接的な構成要素となるという語彙＝文法的な単位としてとらえる。さらに、名づけとしての単語の性質を拡大したものを語結合とし、この語結合の考察を詳細におこなっている。語結合は、現実の断片を写し取っている点、陳述性を排除するという点で単語と共通するが、単語よりはくわしい現実と対応している。こうして、二言語間対照の共通の尺度を用意するのである。著者の立場は、伝統的な国文法（日本語文法）の単語観にもとづくものでもなく、また中国で一般的な形態素を核においた文法とも異なる。単語を語彙と文法との要の位置にすえ、単語の範列的（paradigmatic）な側面を重視した立場であり、いわば、ヨーロッパの伝統的な文法観に依拠した文法といえる。中日両言語における教科文法では、もっぱら文法的な形態素にのみ文法性をみとめようとするために、有標の形式のみがとりあげられたり、あるいはもっぱら有標の形式が強調されるところから、その結果として無標の形式が無視されがちである。中日両言語を対照する視点として、ヨーロッパの言語に一般的な、範列的な関係を重視する研究は、新鮮であり、斬新である。一方で、中国語であれ日本語であれ、さまざまな種類の形式について、あたかもひとつの品詞をつくるような文法的な形態素（三上章のいう準詞）のような単位の存在に言及するなど、中国語・日本語にみられる個々の特殊性をも考慮して、過剰な一般化に走ることなく、言語事実に対する柔軟な姿勢がうかがえる。

メインとなる第三章で、中国語と日本語の形式動詞とむすびつく要素の形と意味、形式動詞の文法的な意味の関与などを吟味し、両言語の共通点と相違点を指摘したことは、この論文の最大の功績といえる。特に、語彙的な受動と文法的な受動の関係を中日の言語表現の中で対応させて、興味深い結果をみちびいている。

著者の研究対象である兼用の形式動詞は、実質動詞からの派生であり、また中国語における前置詞（介詞）と日本語における後置詞とは、中心的な品詞である動詞から周辺的な品詞である側置詞への変化であるという。これは、今日の言語研究の話題のひとつである文法化の現象である。この論文は両言語の異同を提示していて、言語の類型学にも寄与できるであろう。

著者がとりあげた形式動詞をふくむ構造は、個別言語をこえて、近代語の中で必然的に発達をみた言語形式といえるであろう。動詞が脇役にまわり、名詞が核となる名詞中心の文構造である。新聞の報道記事、評論、科学文献、法律などの公的な文書、機械類の説明書といった書きことばのジャンルによくみられる文章である。個性豊かな文体の対極に位置する、没个性的で、固定的慣用的な性質を帯びた硬直した表現のスタイルである。この種の表現は、報道・記録といった実用性がもとめられる世界で、ものごとを論理的明示的に表現する文体として確立してきたと思われる。中日両言語には、ここに「漢語」名詞が深い関わりをもっている。今後、形式動詞をふくむ構造の生じる背景に焦点をあてた考察が期待されるであろう。

著者の関連領域に対する理解はおおむね確かであり、中国語学・日本語学のどちらにも広範な知識を備えていることが随所にうかがわれる。論文は、著者にとって第二言語である日本語で書かれているためか、若干の誤字、表現上のねじれが散見するのが惜まれる。

論文は、全体の構成において確固とした形式を整えている。専門用語の使い方も概ね妥当で、論文の鍵となる術語については、筆者なりの定義づけが施されていて、特に問題はない。

本論文は、博士（日本語日本文化）（同志社女子大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認める。

博士學位論文内容要旨

2004年 9月 17日

学位申請者	楊 華
審査委員	主査 村木 新次郎 
	副査 寺川 眞知夫 
	副査 李 慶祥 

(要旨)

この論文は、以下の五章からなり、中日両言語における動詞の基本概念、形式動詞の位置づけ、形式動詞をふくむ語結合の諸特徴(とりわけ、その文法的意味)について、考察したものである。考察の対象は、現代の中国語と日本語による文学作品、論説文、新聞などとそれらの対訳である。

第一章「先行研究と本研究の位置づけ」では、中日両言語の形式動詞をめぐる過去の研究取り上げ、それらの問題点を整理するとともに、この論文における立場を明確にしている。日本語に関しては、形式動詞と補助動詞、形式動詞とコピュラ、形式動詞と複合動詞のかかわりなどを整理している。中国語に関しては、形式動詞をふくむ語結合(詞組)についていくつかの先行研究があるが、形式動詞がになっている文法的意味について言及されたものがほとんどないことを確認し、形式動詞とコピュラのかかわり及び形式動詞の範囲について整理している。

第二章「中日両言語の動詞の形態論」では、中日両言語の動詞の形態論全般と動詞を核とする語結合の特徴を整理している。文法における単語という単位の重要性と形態論の位置づけを確認し、両言語の形態素、単語、語結合、文の概念規定を整理している。両言語には、単語および言語の諸単位をめぐる、なお未解決の問題が数多く存在しているが、単語のもつ本質的なものは基本的には同じであると考えられる。両言語における単語と形態素の中には、語彙的な要素と文法的な要素がふくまれていることを確認している。この論文では、次のような立場をとる。

(1)単語は、基本的には、命名の単位であるという語彙的な側面と文の直接的な構成要素となるという文法的な側面をあわせもつとも基本的な単位と見なされる。

(2)形態素は、語彙と文法との発達に伴って単語から分化した単位で、単語に従属する形式である。形態素は、合成語や文法的な単語形式をつくるための形式で、単語に対して派生的な関係にある。

中日両言語における動詞の形態論についての特徴は次のとおりである。

(1)中国語は、日本語と比べると、形態論的なかたちが相対的に欠けてはいるが、文法的なかたちづけを行なっている形態素も少なからず存在する。形態論的なかたちの欠けているところは、語彙的な要素など、他の言語的な手段の助けによって文の意味論的なカテゴリーを表現して、文法性を補完している。

(2)動詞が核となる語結合において、日本語の場合は、前置する名詞の格の違いによる分類が基本である。一方、中国語の場合は、名詞に格のカテゴリーがないので、語順及び前置詞が重要な文法的な手段とされる。

第三章「形式動詞」では、「実質的な意味をもたないか、あるいはそれが希薄化して、他の語とひとまとまりになって述語を構成する文法的な機能をはたす動詞」を形式動詞と定義する。中日両言語における、このようなタイプの語類が存在することを指摘している。さらに、中日両言語における形式動詞の概念、形式動詞結合とその特徴、形式動詞の文法的な意味について、中日対訳の実例に基づき、分析を行なっている。

I)形式動詞の概念における、両言語の共通点は①②であり、相違点は③である。

①両言語には、ともに典型的な形式動詞と兼用する形式動詞の2種類がある。

②兼用形式動詞は、(a)実質動詞的な用法(b)弱形式動詞的な用法(c)形式動詞的な用法に分けられる。ただし、その境界線は明白ではない。

③日本語の動詞は活用のパラダイムがあり、他の品詞と語形上、明らかに対立している。中国語の動詞は形態論的な特徴が希薄な言語であって、名詞や形容詞との間に際立った対立が見られない。

II)形式動詞結合における、両言語の共通点は①であり、相違点は②③である。

①両言語とも、形式動詞とむすびつく主要素は以外に、その周辺に状態や現象を表す名詞、さらに形容詞もある。

②形式動詞とむすびつく要素は、日本語では動作名詞が中心であるのに対して、中国語では対象化された動名兼類の語が中心である。

③形式動詞語結合の特徴として、日本語においては結合の強さ、名詞表現、動詞との交替および統語論的な特徴などが指摘できる。それに対して中国語においては結合の強さ、表現の具体化、他の動詞との交替あるいは削除可能などが挙げられる。

III)中日両言語における形式動詞をふくむ、ひとまとまりの語結合は、文の中では全体で述語相当の機能をはたし、実質的な意味は形式動詞とむすびついた動作名詞(日)/動名詞(中)がなう。形式動詞はもっぱら文法的な特徴づけを行なう。本研究はヴォイス(受動、使役を中心に)、アスペクト、ムードなどの特徴から形式動詞のはたす文法的な意味に言及した。

III-i ヴォイス的な意味における、両言語の共通点は①であり、相違点は②③④である。

①両言語とも形式動詞による語彙的ヴォイスが存在している。

②日本語では文法的、語彙的な両形式がはっきりと分離しているのに対して、中国語では文法的、語彙的な両形式は重なっていて、語彙的なヴォイスが場合によっては、文法的なヴォイスになるケースがある。

③対訳の実例では、日本語の語彙的ヴォイスは中国語の語彙的ヴォイスに翻訳され、中国語の語彙的ヴォイスは、ほとんどの場合、日本語の文法的ヴォイスに翻訳されている。

④日本語における形式動詞をふくむ語結合がヴォイスの基本となるかたちで、「-する」と交替するものである。一方、中国語におけるヴォイスの基本態と対応する形式動詞は削除可能か、他の形式動詞と交替できる。

III-ii アスペクト的な意味における、両言語の共通点は①②③であり、相違点は④である。

①両言語とも形式動詞による幅広いアスペクト的な使用がみられる。

②両言語ともアスペクチュアリティーに關与する語彙的なタイプ、語彙形態論的なタイプ、形態論的なタイプ、語彙統語論的なタイプがある。伝統的には中国語のアスペクトに関する研究は主に語彙的な手段のアクションスアルトの側面に偏っているが、この論文は、文法的な手段の形態論的、語彙統語論的な側面にふれている。

③両言語の中で、アスペクト的な意味をもつ形式動詞は他の文法的な意味をもつ形式動詞と比べて、実質的な意味を比較的とどめている。

④中国語のアスペクト的な意味をもつ形式動詞の日本語訳をみると、中国語のアスペクト的な意味をもつ形式動詞の文法化が進んでいることがうかがえる。

III-iii ムードにおける両言語の共通点(①)と相違点(②③)がある。

①両言語ともムード的な意味に関わる形式動詞が存在する。

②日本語には、主体の願望、主体の意図性、動作主体の示威を表わすものがある。




③中国語には、主体の意志、命令、評価を表わすものがある。なお、ムード性を表わす補語と共起する使役動詞によって表わす場合が多く見られる。

第四章「日本語の後置詞と中国語の前置詞」では、両言語における動詞の文法化による側置詞をとりあげて、対比している。

第五章「むすびと今後の課題」では、各章のまとめを総括した上で、両言語の形式動詞をふくむ語結合の構成要素のはたす「漢語」の役割の重要性、そしてともに文章語の領域でその表現を発達させているというところから、両言語における形式動詞の使用の実態を中国語および日本語の近代化という点に注目した考察の必要性についてふれている。

試問結果の要旨

2004年 9月 17日

学位申請者	楊 華
審査委員	主査 村木 新次郎 
	副査 寺川 眞知夫 
	副査 李 慶祥 

(要旨)

審査員3人は、2004年8月3日午後1時から2時40分まで、学位申請者楊華氏に対し、本論文に関する公開の試問を行なった。はじめに、申請者による口頭での論文要旨の発表があり、続いて審査員から数々の質疑の応答があった。審査員の質問や疑義に対して、申請者は概ね的確な回答をした。いくつかの論点については、審査者と申請者の間で議論が展開された。言語単位や文法観をめぐって、審査にあたった委員と申請者の間で認識が食い違う部分もあった。回答を通して、申請者が中国語と日本語の言語現象に対して深い理解と見識をもっていること、事例を鋭く分析する能力を備えていることが確認された。

よって、本論文の提出者楊華氏が博士（日本語日本文化）（同志社女子大学）の授与に値する十分な学力を有するものと認める。